

日本看護管理学会が「新型コロナウイルス感染症対応から学ぶ看護マネジメント研修(第2回)」を開催

感染者の受け入れ時、クラスター発生時に重要な看護管理実践

2021年11月6日(土)、日本看護管理学会による「新型コロナウイルス感染症対応から学ぶ看護マネジメント研修」の第2回がオンラインで開催された(動画と資料は学会Webサイトで配信中)。本号ではその模様を報告する。

(本誌編集室)

日本看護管理学会は、「新型コロナウイルス感染症に対応する看護職員の確保及び最適なマネジメント検討に向けた実態調査研究」(2020年度厚生労働科学特別研究事業、研究代表者＝武村雪絵氏)から得られた成果を、新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)対応から学ぶ看護マネジメントの10(+2)のポイントとして整理。その内容を看護管理者に分かりやすく伝えるために、本研修(2021年度厚生労働省看護職員確保対策特別事業として受託)を2021年8月から全3回にわたり実施している(本誌2021年12月号参照)。

第2回となる今回は、「感染者の受け入れ時あるいはクラスター感染発生時に重要な看護管理実践」をテーマに、講演と全体討議が行われた。

クラスター発生と感染者受け入れの経験から

研修ではまず、前述した特別研究事業の主任研究者である武村氏(東京大学大学院)が、「患者受入時・クラスター発生時の重要な看護管理実践」と題した講演を行った。武村氏は表に示す6つのポイントについて、「看護体制を構築するフェーズ」「組織運営を続けるフェーズ」の2つの流れに沿い、病院での取り組み事例を交えながら解説した。

続いて、永寿総合病院統括看護部長の北川順子氏、藤田医科大学岡崎医療センター看護部長の小島菜保子氏による特別講演が行われた。

北川氏は、2020年3月に発生したクラスターの経験について振り返り、委託業者の撤退や業務縮小、院内メンタルサポートチームの立ち上げ、新卒看護師の採用断念、他院への看護管理者派遣、地域住民との交流など、クラスター発生から3か月間に起こった出来事を、時に声を震わせながら語った。さらに「私たちの経験を伝えることで、決して繰り返さず、新しい乗り切り方を自施設に合った方法でつくり出していく一助になれば」というメッセージを送った。

小島氏は、2020年2月の「ダイヤモンド・プリンセス号」乗客乗員の搬送から2021年の第5波まで長期にわたりCOVID-19患者を受け入れてきた経験から、組織体制、感染防止対策、職員の健康管理などの取り組みを報告。「常に変化が求められるCOVID-19対策においては、柔軟に変化できる組織づくりが重要である」と述べた。

全体討議

続いて、講演した3氏のほか、同学会理事の秋山智弥氏(名古屋大学医学部附属病院)がファシリテーターとして加わり、全体討議が行われた。

冒頭で、秋山氏と武村氏は、現場の看護部長2人の話を心が震える思いで聞いていたと述べ、現場の看護管理者の活動に寄り添う姿勢を示した。その後の討議では、「6つのポイント」に沿って、北川氏と小島氏が自施設の経験を踏まえて考察するとともに、参加者から質問があった「看護管理者へのメンタルサポート」「自身のセルフケア」「スタッフとの情報共有の方法」「他職種への業務依頼の方法」などについてディスカッションが行われた。

北川氏は講演に続き、言い出しにくいことを「言ってもいい」環境をつくることや対話の重要性、クラスター発生時の情報開示についての経験を述べた。また小島氏は、看護管理者のメンタルサポートの重要性とともにセルフケアが大切と語り、管理者が疲弊している状態ではよい意思決定ができないと述べた。

*

第3回の研修は11月27日(土)に「現在、そして将来の新興感染症に備える看護管理」をテーマにオンラインで開催。第1回、第2回と同様にオンデマンド配信での公開も予定している。

表 感染者受け入れ時・クラスター発生時の重要な看護管理実践 6つのポイント

- ①感染者に対応する看護職員の選定方針を説明し、心・技・体が整う看護職員を確認しながら再配置を進める
- ②感染対策を含むさまざまな人的・物的支援を職員に届ける
- ③看護職員が担うべき業務に集中するために組織内の利用可能性のある資源を探し出す
- ④最新の情報や院内の情報を速やかに職員に届ける仕組みをつくる
- ⑤組織内の差別的発言・温度差や周囲の風評被害により職員が傷つけられることを防ぐ
- ⑥看護管理者は正解がわからない状況でも前に進むために選択し説明することを続ける
 - ・自らの心身の健康を保つために、組織内外に支援を求め、看護管理者自身も休養をとる(+αポイント)